

「お手紙」の読み

上越教育大学教職大学院

松本 修

「お手紙」は、現在三社の教科書で小学校2年生の読書教材として採用されている。アーノルド・ローベルのシリーズ作品のうちの一つで、教科書では、三木卓の訳による日本語版をもとにしたテキストが使われており、挿絵も原作のものが用いられている。フロッグ（日本語訳ではかえるくん）とトード（日本語訳ではがまくん）を二人の主人公としたほのぼのとしたシリーズは、たとえばアマゾンのホームページでは次のように解説をほどこされている。^{*1}

このかわいらしいペアは、なくしたボタンを探したり、春にあいさつをしたり、郵便を待ったり、5つのすてきな物語をびよんびよん飛び回る。2人が互いを心から思いやる気持ちはすばらしく、トードとフロッグは両生類の姿をしたすばらしいお手本だ。子どもたちはフロッグと一緒にトードが愚かしい努力をするのを見て、くすくす笑うだろう。そして長い冬眠からついに目覚めるトードに、きっと拍手を送ることだろう。5番目の物語は、いつかペンパルを持とうという人や、本当に信頼のおける友だちがいるのがどんなことか知っている人なら、誰でも心があたたまることだろう。

あたたかくゆかいな友情の物語を演出するアーノルド・ローベルのブルーとブラウンのイラストは、すべての読者の心をひきつけ、気持ちよく楽しませてくれる。ローベルの名作「Frog and Toad」シリーズの一作である本書は、カルデコット賞を受賞し、全米図書賞児童文学部門でも最終候補に残った実力をもつ。ぜひ子どもの本棚に加えたい一冊だ。

話の梗概は、次のようなものである。

がまくんが玄関に座っているところにかえるくんがやってきて、「きみかなしそうだね。」と言う。がまくんは、手紙をまっけているが、手紙をもらったことがないので、ふしあわせな気もちになるんだと答える。二人はかなしい気分でげんかんにこしを下ろしている。

やがてかえるくんは「しなくちゃいけないことがある」と家へ帰り、がまくんへの手紙を書く。そして家から飛び出し、知り合いのかたつむりくんに手紙をがまくんの家の郵便受けに入れるように頼む。

それからかえるくんはがまくんの家に戻り、がまくんに手紙を待つように誘い、手紙

*1 アーノルド・ローベル 三木 卓訳 (1972) 『ふたりはともだち』文化出版局 の解説 <http://www.amazon.co.jp/>

を待つ。しかし、かたつむりはなかなかやっこない。手紙なんて来やしないというがまくんに、かえるくんは、自分ががまくんに手紙を出したことを話す。そして、その手紙の文面も教える。がまくんとかえるくんは、玄関に出て、しあわせな気持ちで手紙を待つ。四日たってかたつむりが着き、がまくんへ手紙を渡す。

この物語を読むと、大きな疑問が残る。それは、「かえるくんはなぜがまくんに手紙の内容を教えてしまったか。そして、手紙の内容を知った二人が、なぜ幸せな気持ちで手紙を待っているのか。」ということである。前半は、がまくんが手紙なんて来ないというので、待ちきれずに教えたと一応答えることが出来る。しかし後半の問いは難しい問いである。

この作品やこれを教材とした授業論はほとんどないが、ネット上ではいくつかの教材論らしきものを見ることができる。そのうちの 하나가、この点についての発問を提示した次の論である。^{*1}

「二人とも、ともしあわせな気持ちでそこにすわっていました。」とあります。かえるくんは、お手紙を持つことがしあわせなのですか。

がまくんは、お手紙を持つことがしあわせなのですか。いっしょにいることがしあわせなのですか。

かえるくんは、悲しそうでないがまくんと、いっしょにいることがしあわせなのである。一方、がまくんは、前述の『ああ。』の解釈によって、異なってくる。

つまり『ああ。』が、『きみの親友、かえる。』を受けていると考えれば、しあわせな気持ちにさせているのは、手紙を待つことと、いっしょにいることの両方となる。

しかし、『ああ。』を『いいお手紙だ。』のつながりと考えれば、手紙を待つこととなる。

がまくんは、かえるくんと一緒にかえるくんからの手紙を待っている。すでにふたりは「親友」として結ばれていることをかえるくんの手紙の言葉によって示されており、がまくんがかえるくんの手紙を待つことは、かえるくんと一緒であることによってより幸せなものとなる。分けられるものではない。ほとんど意味不明の論であるが、冒頭の玄関の場面と末尾の玄関の場面の比較が重要であり、「手紙の内容を知った二人が、なぜ幸せな気持ちで手紙を待っているのか。」ということを考えることがこの物語の読みのポイントであることは共有されている。

二つの場面は次のようになっている。^{*2}

「だれもぼくにお手紙なんかくれたことがないんだ。」

*1 江崎一平 <http://www.fsinet.or.jp/~m-zen/otegami02.htm>

*2 本文は、学校図書『みんなと学ぶ 小学校こくご 二年上』による。

毎日ぼくのゆうびんうけは空っぽさ。
手紙をまっている時がかなしいのはそのためなのさ。」
二人ともかなしい気分でげんかんの前にこしを下ろしていました。

「ああ、」
がまくんがいました。
「とてもいい手紙だ。」
それから二人はげんかんに出て手紙が来るのをまっています。
二人ともとてもしあわせな気持ちでそこにすわっていました。
長いことまっています。

「かなしい気分で」が「とてもしあわせな気持ちで」に、「こしを下ろしていました」が「すわっていました」に変化している。「こしを下ろして」いるよりも、「すわって」いる方が、安定性を増している。この変化は重要である。^{*1}

また、挿絵を見ると、次のような違いがある。冒頭の二人は、悲しそうな表情であり、それぞれの膝のところで自分の両手を組んでおり、がまくんは左足を右足に重ねて、指は力なく伸びている。一方、末尾の二人は、互いに肩を組み、楽しそうな表情であり、足の指は、ピンと上を向いて躍動的である。

この変化は、もちろん、手紙の内容を知った二人が、なお幸せな気持ちで手紙を待っているということによってもたらされている。それはなぜなのだろうか。

結局のところ、二人は四日も手紙を待つことになる。それくんは、かたつむりに手紙を頼んだことに起因している。かえるくんは手紙をなぜかたつむりに託したのだろうか？

小学校2年生がどうこの問題を考えるのかを知るために、次のようなインタビューを行った。

「お手紙」の読み調査（親子インタビュー）1

2008年10月27日 2年生男子

母親が、教科書の「おてがみ」を何度も読み聞かせていた。

調査ではまず、子ども一人での音読、母親と子どもでの「かえるくん」と「がまくん」に分かれての音読を行う。

この子どもは、一人で石を並べて石に教科書を読み聞かせるというような「遊び」もしていた。なお、母親は小学校の教員である。

インタビューを起こしたプロトコルを見ると、次のようなやりとりになっている。（下線は松本）

*1 この二カ所の表現の比較が重要な意味を持つことについては、2008年8月30日の第2回 RISE セミナーにおける筑波大学附属小学校 白石範孝教諭による授業に啓発された。

M:母 T:たすく Y:ゆうや (友達) H:はやと (友達) S:しゅうへい (友達)

- M1 どうしてかえるくんは、かたつむりくんにたのんだんだと思う？
- T2 そりゃあ、当たり前だよ。お手紙っていうのは、他の人がとどけるからお手紙なんだよ。自分で持って行って、「ハイお手紙」だと、「ああ、ハイハイ」みたいな感じで、がまくんもあんまり喜ばないでしょ。
- M3 どうして？
- T4 他の人が届けるからいいでしょ。来るかなドキドキ。やった。だれかな。みたいな。だからわざわざかたつむりくんに頼んだと思うけど。
- M5 じゃあ、例えばだよ。Yくんがお手紙が来なくて悲しんでるとして、Tが家に帰ってお手紙書くとするでしょ。そしたら、だれかに届けてって頼む？
- T6 頼む。ぼくがさ、自分で届けてもたいしたうれしさじゃないよ。
- M7 誰に頼むの？
- T8 Hくんかな。いや、やっぱりSくんにする。
- M9 どうしてSくんなの？
- T10 だって、Hくんは足が速いからさあ、ぼくより先に着いちゃうでしょ。5分待つてから来て、っていてもさあ、気が早いから待つてられないかもしれないもん。Sくんだったら、Yくんが悲しんでるからって言えば「えっYくんが」って言ってちゃんと待つてからちゃんと来てくれるはず。
- M11 どうして5分待つてから届けてほしいの？
- T12 お手紙きつと来るから待つてみようよ、とかなんたりかんたり。とか言ってさ。いっしょに待つてあげたいでしょ。お手紙待つて楽しい、みたいなさ。やっぱり1時間にしようかな。
- M13 Sくんに1時間待つてから届けてもらうってこと？どうして？
- T14 Sくん待つてくれるかな。たぶん。やさしいから。ぼくにとっては長い方がいい。
- M15 どうして？
- T16 長くないと、がまくんみたいに、待たないうちに着くと悪い。お手紙くるよ。わくわくって感じで待つた方がいいから。長くないといじけたままだと困る。
- M17 いじけたままじゃだめ？
- T18 うん。お手紙来るかもよ。わくわくってのがいい。
- M19 じゃあ、どうしてかえるくんは、がまくんにお手紙出したことやお手紙に書いたことを教えちゃったのかな。「しんあいなるがまがえるくん」とか書いたこと教えたでしょ。
- T20 納得させるため。がまくんのいじけた気持ちを変えさせるために教えた。そうしないといっしょに待つてくれないから。
- M21 いっしょに待つてことが大事なの？
- T22 しあわせな気持ちってことが大事なんだよ。お手紙待つてしあわせだと分かるんだよ。ふたりで待つてるところにかたつむりがもってきて、ふたりで喜ぶ。
- M23 じゃあ、待つてるシーンの絵を見てみようか。はじめとおわりの絵を比べてみようね。どこが違う？

- T24 がまくんの目が笑ってる。微妙に。はじめは、悲しい感じ。
 M25 あとは？
 T26 口があいてる。しゃべってる？「もうすぐ来るよ」「楽しみだな」みたいな。
 M27 あとは？
 T28 う~~~~~ん。手が違う？
 M29 どうちがう？
 T30 おたがい組み合ってる。最初は自分で組んでる。
 M31 あとは。
 T32 わからん。

手紙を待つ時間が必要であること、がまくんを納得させて一緒に待つために中身を教えたことが説明されている。待つ時間は長い方が良く、幸せな時間を共有することが大切であるとしている。がまくんが誰も手紙をくれないといういじけた気持ちから解放され、中身を既に知っている手紙を長い時間かけて待つことに必然性があるということが十分に示されている。配達人は、かたつむりくんでなければならなかったのだ。

そしてこのインタビューにはもう一つ重要なことが語られている。手紙であることの必然性である。なぜがまくんは手紙にこだわったのか、そしてかえるくんは手紙を書いて第三者に託したのかという点である。インタビューイの言うように、自分で届けたのでは手紙ではない、というところに要点があるものと考えられる。このインタビューではその内実は十分にはわからなかったので、再調査を試みた。方法は最初のものと一緒にある。

「お手紙」の読み調査（親子インタビュー） 2

2008年12月29日 2年生男子

母親と子どもでの「かえるくん」と「がまくん」に分かれての音読を行ったあと、インタビューを行っている。

インタビューを起こしたプロトコルを見ると、次のようなやりとりになっている。（下線は松本）

「お手紙」についての親子インタビュー 2

08. 12. 29

M:母 T:たすく

- M1 じゃあ、TにTがこのお手紙のお話のことをどう思っているか聞きたいんだけどいいですか。
 T2 はい。
 M3 かえるくんはさあ、がまくんにお手紙を書いたでしょ。で、それを自分で渡さなくてかたつむりくんに頼んだでしょ。どうして頼んだんだと思う？
 T4 どうしてかっというと、が、が、がまくんをすぐ信用するかなと思って、かたつむりくんに頼んで、ねえやってみようよ、とか言って、お手紙が来るのを誘ってた。
 M5 う〜ん。じゃあ、どうして自分で渡さないわけ。
 T6 渡さないのは何でかって言うと、自分で渡しても相手は喜ばないから。じゃあさあ、

言うよ、「じゃあ、これお手紙、自分で書いたお手紙、はい。」なんかさあ、ドキドキしないでしょ。

M7 うん、確かにね。書いた人からもらったら、ってことでしょ。

T8 でも、「これ、かえるくんからのだよ。」ってもらったら、「これ、何があるんだろう〜。」

M9 「何かいてあるんだろ〜」とか。

T10 あと、とっってもいいなあ、とか、こんなこと書いてあったんだ、とか、びっくりしたり、気持ちが伝わる、っていう感じ。

M11 他の人からもらうと、気持ちが伝わるってことなんだ。本人からもらうより伝わるわけ。

T12 まあ、伝わるかな。

M13 どうしてかなあ。

T14 こうさあ、自分でさあ、「あるよ。」って感じで渡してさあ、でも、人から「お手紙だったよ。」って渡してさあ、こうやって、渡してもらうと、ドキドキしてうれしくなっちゃう。「何だろう、何だろう。」って感じがして、おもしろくなっちゃう。あと、こういうのが書いてあるんだ、どういう感じで書いてあるんだろう、って考える。

M15 なるほどねえ。じゃあさあ、どうしてかたつむりにたのんだんだろうね。

T16 足が遅いとはかん、あと、目の前にいたし、あと、そんなに足が遅いとは気づかなかった。

M17 じゃあ、足が遅い人に頼んじゃって失敗したってこと？

T18 失敗してはいない、ドキドキして「来やしないよ。」とか言ってたけど、

M19 誰が誰が

T20 がまくんが。でも、こうだよ、ってことを教えてあげて、がまくんもドキドキして喜んだでしょ。だから、失敗ではない。

M21 う〜ん、もっと足が速い人に頼めばよかったんじゃないの？

T22 でも、足の速い人にいくと、呼びかけたりする暇がなくなる。例えば、しようよっていう前に、はいこれ〜みたいな感じで、はいお手紙、って感じですぐ渡されちゃう。かえるくんからすぐ渡されちゃう。

M23 すぐ渡した方がいいんじゃないんだ。

T24 遅くくると、「何があるんだろう。」っていう感じがますます伝わってくる。遅くくると、一緒に待ってあげて、相手によかったね、とか言って、うれしく励ますっていうか、うれしくする、うれしくさせる、(お手紙もらうってことを) うれしいって思うように、よかってね、って言葉でいうと、がまくんとか、お手紙もらった人が喜ぶ。「ぼくがあげたんだよ。」って言ったら、「へっ君が。なんて書いたの？」って言ったら「親愛なるがまがえるくんへ」っていい言葉だったから、感動しちゃって「これは、君が渡したお手紙があるんだね。一通でもいいから、渡してくれたお手紙があるんだね。これでぼくはもう、安心だよ。」って感じで。

M25 なるほど。

T26 かたつむりくんも、本当にぼくが役に立てたのかな、って感じ。

- M27 なるほど。ぼくも
- T28 思ってた、みたいな感じ。
- M29 じゃあ、二人だけでやるのと、かたつむりくんがいるのとではどう違うの？
- T30 励ます人が一人だとさあ、「ああ、よかったなあ」だけどさあ、
- M31 うんうん。
- T32 無事届いたね、ってその人がいうとするでしょう。かえるくんがいうとするでしょ。そうしたら、「よかったね、がまがえるくん、無事お手紙が到着して」みたいに（かたつむりくんが）言うと、かえるくんとか、その人が、
- M33 その人ってかたつむり？
- T34 う、うん、役に立てたのかな、とか、がまがえるくんは、届いてよかったな、ってことを併せて、友情みたいな。いい、友達になる。
- M35 お手紙もらって、いい友達になるんだ。そうか。あと何か言い残したことがあるか？
- T36 まず、がまがえるくんが信用してくれたことがいいな、って信用したことがえらいな、って思う。
- M37 手紙なんか来ない、って言ってたのに信用したんだね。
- T38 「ぼくが書いたんだよ。」「うそだよ。」とか言わないで「きみが書いたの？」って逆に驚く方でしょ。だから、それもえらいな、と思う。
- M39 それ、どこだ。
(本文を読む)

かたつむりくんによって手紙が遅れて届けられることの意味がふたたび語られており、この読み手の「読み」は変化していないことが見て取れる。その上で、手紙とは、他者によって届けられることで意味があること、そして、おそらく文字で書かれていることによって、より気持ちが伝わるということ、第三者の媒介によって、友情が確かめられるというようなことが述べられている。

かえるくんはがまくんに、「手紙になんて書いたの？」と聞かれ、こう答えている。

「ぼくはこう書いたんだ。『しんあいなるがまがえるくん。
ぼくはきみがぼくのしんゆうであることをうれしくおもっています。きみのしんゆう、かえる。』」

内容が明かされた手紙を待つことの意味は、まさに待つ時間を共有するということにあった。そのためにかたつむりくんが配達人として必要とされたわけだ。しかし、そもそもなぜそれは「手紙」でなければならなかったのか。それは、面と向かって「僕は君の親友だ」と口で言うような形では、言葉の本質的な意味で相手に届けられる言葉にはなり得ないからだ。言葉は、第三者によって媒介され、証されることで、真の意味を獲得する。かえるくんがいくら「こう書いた」と言って手紙の内容を明かしても、がまくんは「いい手紙だ」とはわかって幸せになっても、実際に「手紙」が配達されなければ、その幸せを確かめることができない。インタビューイは、「がまくんとかえるくんとかたつむりくん」

の三者によって友情が確認されるというように、物語の文脈に即して説明しているが、手紙が手紙でなければならないことの理由を直観的に理解しているものと思われる。

こうしてみると、この物語の読みにおける学習では、冒頭と末尾の場面の表現と挿絵の比較を契機に、「かえるくんはなぜがまくんに手紙の内容を教えてしまったか。そして、手紙の内容を知った二人が、なぜ幸せな気持ちで手紙を待っているのか。」という問いをめぐって、さらに、「なぜかたつむりくんによって手紙が届けられなければならないのか。」「そしてそれはなぜ手紙でなければならないのか。」を問わねばならないということになるだろう。

小学校2年生段階では、解釈の言語化や、自分の読みに対するメタ認知には限界がある。しかし、一方、直観的であっても、本質的な読みは行われている。このような問いをめぐって、何らかの形で話し合いを展開することは可能である。そのような学習を集団の中でどのようにデザインするか、それが課題として提示されているものと思われる。